

●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

# SHINWA WALK 18

## 玉照姫伝説(笠寺観音)

伝説  
兼平と出会い  
お姫さま  
縁を結んだ  
笠かけ観音



### 善意の娘を見初め結婚

### 後に笠寺観音を建立

笠寺観音は、聖武天皇(てんむ)の天平年間(729年～745年)に僧禪光によって開山されたのがはじまりとされています。禪光は呼統の浜に打ち上げられた霊木をもとに十一面観音像を彫り、これを本尊としました。当時は現在の地より約700メートル南の粕島町にあり、寺名も小松寺と称していました。しかし、しばらく経つと寺は荒れたまま放置され、以前はお堂の中に祀られていた観音さまも雨ざらしとなっていました。

ある雨の日、観音さまの前を通りかかった貧しい身なりの娘がいました。彼女は鳴海のお金持ちの家に使われている「お玉」という娘でした。観音さまが雨に濡れているのかわいそうに思っただけのお玉は、観音さまの体をきれいに拭いて、自分の笠を脱いでそれを観音さまの頭に被せ、お玉は雨の中をずぶ濡れになって、帰って行きました。この様子を遠くからじっと見守っていたお公家の一行があり、都で高い位にあった藤原兼平でした。

半年ほど経ち、兼平は都へ帰る途中、鳴海のお金持ちの家に宿泊しました。庭掃除をしている娘を見て、兼平はハッと驚きます。観音さまに笠を被せていた娘だったから

です。喜んだ兼平は、その主人に話してお玉を都に連れて行き、やがて名前も玉照姫と改め、お側に仕えるようになりました。心の優しい玉照姫はみんなに可愛がられ、後に兼平の妻になりました。

幸せな日が続く中で、玉照姫は故郷のあの観音さまのことが気がかりでした。そこで兼平は玉照姫と一緒に呼統の里を訪れ、延長8年(930年)、寺を再建、観音さまを笠で覆ったエピソードにちなんで、寺名を「笠覆寺」と改めました。一般に呼ばれている「笠寺観音」は俗称です。

兼平は太政大臣・藤原基経の三男。笠寺観音はその後、戦乱や熱田神宮との領地をめぐる争いでなくなりましたが、延元3年(1238年)、阿願という和尚により再建されています。玉照姫を祀る観音堂も笠寺観音の西側にありましたが、明治22年(1889年)、笠寺観音のすぐ南の泉増院に移されました。



### ヘラの邪魔にも負けず 太陽神と月の女神を出産

ギリシャ神話で、玉照姫のような存在といえば、ゼウスと結ばれたレトです。レトはゼウスに愛され、双子を身ごもります。それに嫉妬したのが、ゼウスの正妻・ヘラです。

今まで日の照ったことのある場所では子どもを生めないように呪いをかけ、レトの出産を邪魔したので、どの町も島も山も、ヘラの怒りを恐れて出産できる場所を貸しませんでした。ここで一計を案じたのがゼウス。海の底にあった島(デロス島)を引き上げ、レトはそこで出産することになったのです。

ヘラの妨害のため出産は長引きましたが、はじめにアルテミス、次にアポロンを出産。アルテミスとアポロンはそれぞれ月の女神と太陽の神になりました。ヘラの呪いの甲斐なく、二人ともヘラの産んだ神々よりずっと偉大な神となったのです。また、ちっぽけな浮島でしかなかったデロス島も、

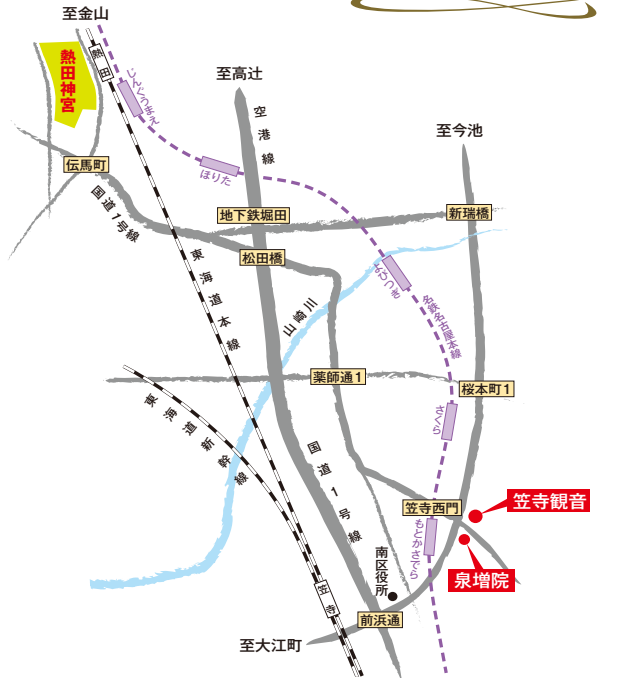
きらびやかな神殿の建つ聖地となり、後々まで栄えたといえます。

ちなみに、アポロンとアルテミスはともに弓矢の名手。アルテミスが狩人であるオリオンと仲良くなったことにおもしろくなかったアポロンは、巨大なサソリにオリオンを追いかけさせました。オリオンはサ



▲笠寺観音(正式名称は笠覆寺)のシンボルの一つ、多宝塔。

## 18th Letter



▲玉照姫を祀る泉増院は笠寺観音のすぐ南。

ソリから逃げるため海に逃げてしまいます。

それを見たアポロンはアルテミスに「弓の名手の姉さんでも、海中のあの遠くの黒いものは射抜くことはできないでしょうね」とけしかけ、アルテミスは恋人であるオリオンの頭を射抜いてしまったのです。アルテミスはオリオンを海から引き上げ、天に掲げました。それがオリオン座で、星座になった今でもサソリ座に追いかけているのです。

兼平に見初められたお玉。ゼウスに見初められたレト。ギリシャ神話きってのプレイボーイのゼウスにはレト以外にも愛人が数知れずいて、事情が大きく違いますが、どちらもハッピーエンドのシンデレラストoryという点では共通しています。

※次回は、長寿寺に伝わる高蔵坊狐伝説について特集します。お楽しみに。

■写真/Kiyoshi K ■イラスト/Rei ■取材文/Icarus